

《たいせつに考え続けていたいことのために》

【夜さろん 第11夜】

▼日時： 2014.8.22（金）@原宿・表参道

▼参加者： 8名

▼内容：

ふだんからはっきり意識していなくても、まだうまく言葉にできなくても、あなたの中に「たいせつに考え続けていたいこと」がありませんか？ そのことについて、「どうやったらたいせつに考え続けていけるだろう？」「たいせつに考え続けていくのに適した空間ってなんだろう？」「同じように大切なものを抱えた人たちと上手に考えることはできるだろうか？」ということなど、ゆっくり、丁寧に話し合ってみたいと思います。

※みなさんの抱えている「たいせつなこと」自体は披露していただくなくて結構です。

▼進め方：

下記の参考資料のうち、気になったものどれか1冊に目を通して来てください。その感想などを交えながら、「たいせつに考え続けていたい（ささやかだけど大事な）こと」のために、いったいどんな向き合い方や方法が考えられるのか、哲学カフェの要領で、みなさんでぐるぐると対話します。

▼ルール：

- 「聴く」。ひとの話にしっかりと耳を傾けて、途中で遮らず最後まで聴く。
- 「話す」。じぶんの言葉で丁寧に、できるだけ伝わり易い仕方で話す。
- 「考える」。他人の考えとじぶんの考えの違い、とか、どんな風に前提を共有しているかなどを注意深く考える。じぶんの心情を押し付けない。

▼確認：

- お名前は名乗らなくてOK。何度か参加していて名前をご存知な参加者もいますので、名前を述べてくださる方もいらっしゃいますが、必須ではありません。
 - 発言は必須ではありません。この場にいるということが、テーマへの関心のあらわれに他なりません。ですから参加者間の対話にゆったりと耳を澄ましているだけ、という方も大歓迎します。
-
-

【対話の可能性】

「わからないことにかかわれなくなってきた」とは、

- 1、ある事柄について、すでに知っていることとして、それ以上考えない状態。
 - 2、ある事柄について、一定以上理解せずには、動けない状態。
 - 3、ある事柄について、自分とは関係がないこととし、かかわりを持つとしない状態。
- などが含まれていて、そして、どの状態もとても固く、まずいことのように感じるのです。

なぜなら、わたしたちが生きるこの世界は、そもそも「わからない」ことに満ちていて、いつの時代の誰であれ、その「わからなさ」に揺さぶられ喘ぐ、その渦中にいるはずなのではないかと思うのです。ところがこのところ、不可解さを避けるような、明快でクリーンな世界観が溢れつつあるように見え、誰に対してであれ、スムーズに事が進むよう強いるような状況があるように思えるのです。その結果、目前のあれこれをすでに「わかっている」こと、つまり自明のことと理解し、示し、もはやコントロール可能な世界に生きているかのように感じつつあるのだとしたらそれは、とても不自然なことのように思えてなりません。

では、あらためて、いかに「わからなさ」や「自明である」ことを突き抜けて、自ら手探りするのか。どのように、世界を疑い、自らの手で目前の世界を解きほぐし、自身の側へと近づけていくのか。こうした、そのわからないままにかかわろうとするありようそのものが、わたしたちが自らの生を獲得するということなのだ、いま一度確かめてみたいのです。


※




わからないという状態はたしかに苦しい。いってみればいままでもちゃんと息をしていたはずなのに、じぶんにはわかっていることを知ったがために、とたんに無呼吸状態に置かれてしまうからです。じぶんの根っこのところである不明が生じると、それをきっかけに不明が、複雑性が、どんどん増大していかざるをえないからです。

どこまで息を詰めていられるか。複雑性の増大にどこまで耐えられるか。すべてはそこにかかっています。寛容という精神は呻きとともにあり、それを乗り越えようとする苦行のなかからしか生まれてきません。

わかりやすい話の外にいつも出ること、そしてその無呼吸の状態に耐えつづけること。そういうためがもてるかどうか、生きることの意味のすべてがかかっているのだと思います。

参考資料	内容
 <p>「ことば哲学」で対話力と思考力を育てる (河出書房新社、2014)</p>	<p>どんなに親しくても、考え方は人それぞれ。どんなに論理的になれたとしても、考え方を無理には変えられない。意見が食い違ったとき、答えをひとつに決めるのは難しい。でも、「ことば哲学」を通して、相手の話に真剣に耳を傾け、考える時間や言葉を選ぶ時間を持てれば、自分の考えを話しやすい空間が作られていく。問題を創造的に解決し、誰もがその社会の一員だと感じられるような人間関係をつくりだす、コミュニケーション技術の身につけ方を紹介します。</p> <p>第1部 理論編（「ことば哲学」とは何か ほか） 第2部 実践編（環境づくり ほか）</p>
 <p>ミルフイユ 06 わかれないことにかかわれなくなってきた。 (赤々舎、2014)</p>	<p>どのように、「自明であること」を疑い、「わからなさ」を解きほぐし、目前の世界を自分の側へと近づけていくのか。わからないことにわからないまま正確に向き合う。</p> <p>呪術、口承の風景、自由律俳句、縦長のマネキンと横長のマネキン、相撲愛と動画投稿サイト、対話の可能性をひろげながら、様々な問いが現在のわたしたちの日常のなかへと差し出される。わからなさに手をのぼすありようそのものが、自らの生を獲得する、問いの触手がふるえる一冊。</p>
 <p>わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か 平田オリザ</p> <p>いま、本当に必要なこと</p>	<p>近頃の若者に「コミュニケーション能力がない」というのは、本当なのか。「子どもの気持ちがわからない」というのは、何が問題なのか。いま、本当に必要なこと。わかりあえないことを根底にして、コミュニケーションをどう作るかを考えていきたい。</p> <p>これは、プレゼンや人づきあいがうまくなって仕事や人生で成功しよう、などというハウツー本ではありません。むしろ、それへの疑問です。「対話」とは、著者によれば、あまり親しくない人同士のあいだで、あるいは、親しい人同士のあいだでも、異なる価値観や情報について交換し合ったり、すりあわせ</p>

<p>わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か (講談社新書、2012)</p>	<p>をしたりすることですが、日本社会にはこの「対話」という考えがほとんど存在しないと言うのです。同時に、「対話的な精神」とは、異なる価値観の人と出会い、それを通して、自分の意見が変わっていくことを受け入れる態度のことだと述べています。つまり、コミュニケーションとは、自分の考えをうまく伝えるだけでなく、相手の声に耳を傾け、さらには、そこから何かが創造されることなのです。</p> <p>本書の中で、もう一つ、重要な点を挙げれば、「弱者のコンテキストを理解する能力」の必要性の指摘です。つまり、社会的弱者は、さまざまな障壁により、自分の気持ちを整理して伝えることができない場合が多いが、筆者は、自分の学生には、論理的に話す力より、論理的に話せない人々の気持ちを汲むような人間になってほしいと願っています。</p>
 <p>哲学カフェのつくりかた (大阪大学出版会、2014)</p>	<p>フランスに端を発し、日本にも広がっている哲学カフェ。テーマについてその場に居合わせた人たちと話して、聴いて、考えるというシンプルな営みからみえる、社会のなかで互いに言葉を交わすこと、ともに考えることの意味とは何か。臨床哲学研究室の活動から生まれ、対話を通して社会に生きる哲学を探究する任意団体カフェフィロ(Café Philo)が、各地で展開する哲学カフェの実践を振り返りながら、対話の場をひらくことの可能性を展望する。3・11のあと、社会のなかで哲学にできることを問いなおす。</p> <p>哲学カフェではどんなやりとりがされているのか？ 3・11のあと哲学にできることはあるのか？哲学カフェの社会的意義とは？</p> <p>好著。これを「ゆるい」と考えるか、「貴重な場」と考えるか、受け手しいです。確実に言えるのは、哲学カフェは、哲学学者や哲学屋のためのものではなく、哲学的に対話するためのもの、ということ。知識の習得や議論を期待すると肩透かしを食うかもしれませんが、震災を哲学的に考えることや、みんなが哲学者になろうとすることなど、志が高いことだと思います。この本では、哲学カフェが立ち上がりの頃からの試行錯誤や軌跡が記されており、昨今、ビジネス・パーソンに求められるリベラル・アーツ教育のヒントにもなると思います。</p>

 <p>小林正弥 「日本人に 聞くディベートは いらない」 人生も 仕事も 変える 「対話力」 心を動かしあう最強の コミュニケーション 講談社 α 新書</p> <p>人生も仕事も変える 「対話力」 (講談社 + α 新書、 2014)</p>	<p>「対話」は心を動かしあう最強のコミュニケーション。「ただの会話では相手に伝わらない」「誰も教えてくれなかった」実践的メソッド。</p> <p>対話における話し方として特に大事なものは、次の四つのようなものです。</p> <ul style="list-style-type: none">●友愛の精神で、真心を込め、誠実に、礼節を持って話すこと。●相手の世界や意識にチューニングして話すこと。●相手の反応を見ながら、応答的に話すこと。●適切な言葉とタイミングで、真実を話すことです。
 <p>Thinking & Reasoning by Matthew Lipman 探求の共同体 考えるための教室 マシュー・リップマン 著 藤原 正典 訳</p> <p>探求の共同体 —考えるための教室— (玉川大学出版部、 2014)</p>	<p>「子どものための哲学(P4C)」教育の先駆者・設立者の主著の初邦訳。批判的思考、創造的思考、ケア的思考とは何か、どうすれば育むことができるのか。教師は子どもたちにどのような支援をおこなえばよいのか。思考力是对話を重ねる過程で促されることを前提に、哲学教育・思考教育について理論と実践の両面から考察する。態度としての“自己可謬性”について。</p> <p>共同体での対話によって育まれる批判的思考、創造的思考、ケア的思考について理論と実践から紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none">I 思考力のための教育II 探求の共同体III 思考のオーケストラIV 思考をよりよいものにしていくための教育
 <p>クリエイティブ・コミュニティ・デザイン 変わりつくり、巻き込もう</p> <p>自分の生き方を選びとろう これからの世界をつくるすべてのクリエイターへ 働き、住み、暮らし、インノベーションを仕掛ける。</p> <p>クリエイティブ・コミュニティ・デザイン 関わり、つくり、巻き込もう (フィルムアート社、 2012)</p>	<p>これからの世界をつくるすべてのクリエイターへ。働き、住み、暮らし、イノベーションを仕掛ける。</p> <p>「コミュニティ・デザイン」にかかわる 26 人の著者の共著。共通点はある(のだろう)が、それぞれコミュニティについてのかんがえはちがっている。それらの著者のかんがえが共鳴し、ぶつかるなかから、コミュニティというもののすがたがみえてくる。それはちょうど、ひとつのコミュニティのなかにいろいろなかんがえのひとがいること、さまざまなかんがえのひとがうまく共同作業をなしとげたときにコミュニティの成功があるようなものだろう。</p>

【まとめ】

哲学カフェで行われるような、学問的な専門用語や研究上のルールを排した“哲学対話”の醍醐味の核にあるのは、哲学に関する歴史や知見といった思考の〈結果／事実〉を聴講したり学ぶことの魅力、ではないと思います。むしろ、対話を介して自身が〈思考している状態〉であることを体験しつつ、〈思考する（とはどういうことか）〉というまさにそのこと自体について（メタ的に）考える、という点に他ならないのではないのでしょうか。

このことを、読書という“内的対話”と会での“哲学対話”を通して体験していくことを少し試みてみたいという思いがありました。

また、今回は参考図書を思い切ってたくさん挙げてみました。余裕のある方はじぶんの選ばなかった本にも注目してもらいながら、「なんで選ばなかったのか」なんてことにも思いを馳せながら、引き続き“対話”やその先にある“たいせつにしたいこと”について考え続けてもらえればと思います。

どこかにわかりやすい回答が用意されているわけではなく、本と本、対話と対話を繰り返し、時に行きつ戻りつしながら、じぶんなりの“やり方”ができあがっていく過程を感じてもらえたらと思います。ですからコンセプトは“本と対話の交差点をつくること”です。



『談 no. 100 人間、もう一度見つけだす。』

デカルトを嚆矢とする機械論的世界観の登場は、人間を機械と見做し、世界を動かす物理的なシステムの構成要素、いわば歯車に還元した。歯車と最も遠くにあると思われていた人間が、歯車そのものになってしまったのである。歯車でありかつ歯車でないもの。近代以降、現代に至るまで、人間は、この相容れない両輪の、いわば「また裂き状態」に置かれ続けている。

このまた裂き状態のなかで、われわれに対し「新たな人間」という概念を模索する必要性を問うたのが、2011年3月11日に発生した東日本大震災であった。地震・津波・原発事故が、われわれに突きつけたものは、機械としての歯車から、自然である歯車への構造転換だ。今こそまた裂き状態からの脱却が求められているのだ。

3.11から3年、未だ被災地の復興は道半ばであるが、すでにあの時の記憶は風化し始めている。それとともに、3.11が投げかけた「新たな人間」という問いかけも風化し始めているのではないか。だからこそ、もう一度、3.11が突きつけた問題、すなわち「人間」そのものを、自然と科学との関係から問い直さねばならない。

弊誌は今号で、100号を迎える。この記念すべき号で、人間再考の第一歩としたい。

《人間は生き物であり、自然の中にある……科学者と共につくる生命論的世界観》

中村桂子(JT生命誌研究館館長)

科学技術が自然と向き合っていない。東日本大震災で明らかになったのは、この事実であり、現代の科学文明が抱える問題は、おしなべてこの事実に集約できるだろう。科学が生まれ、そこから開発された科学技術によって進歩を続けてきた近代。16, 17世紀の科学革命を経て、自然を一種の「機械」と見なす機械論的世界観が近代を形付けてきた。機械論の特徴は、一切を数値化するところにある。徹底した数値化は、自然を操作可能な対象へと変えてしまった。要するに、自然を「死物化」したのである。私たちは、今一度自然と向き合い、自然を生き返らせることだ。それは、近代の機械論的世界観から生命論的世界観への転換を意味する。

人間が生きものであり、自然の中にあると考える立ち位置を決め、そこに足場を置き、科学がつくってきた世界観を科学者の立場から問い直すこと。東日本大震災後の人間観について、主に科学と人間のかかわりから考察する。

《人間の自由、あるいは思考のための退屈のススメ》

國分功一郎(高崎経済大学経済学部准教授)

國分氏は、著書『暇と退屈の倫理学』で、「退屈と気晴らしが入り交じった生、退屈さもそれなりにあるが、楽しさもそれなりにある生、それが人間らしい生」だと言う。そして、楽しむことは思考することにつながると断言する。楽しむことも思考することも、どちらも受け取ることに同じであり、人は楽しみを知っている時、思考に対して開かれているというの

だ。

退屈とどう向き合っていくかという問いは、あくまでも自分にかかわる問いであると國分氏は言う。しかし、退屈と向き合う生を生きていけるようになった人間は、おそらく、自分ではなく、他者にかかわる事柄を思考することができるようになる。だとすれば、3.11以降、われわれが求めている「人と人とのつながり」を、どう解釈できるのか。それは〈暇と退屈の倫理学〉の中であげられた、「どうすれば、皆が暇になれるのか、皆に暇を許す社会が訪れるか」という次なる課題と、どう関連していくのか。暇・退屈・楽しみを切り口に、3.11以後のエシックス(倫理学)を開陳する。

《「人間的」のなかには、「非人間的」が内蔵されている》

鷺田清一(大谷大学教授、仙台メディアテーク館長)

ヒューマニズム、あるいは人間主義。それは、「人間」というものに、他の何とも替えることのできない固有の「尊厳」を見出す思想である。ひとがどのような境遇にあらうとも、すなわち、どのような階層に属し、どのような国籍、性別をもち、どのような年齢にあらうとも、それら一切とかかわりなく「人間」としてその存在が尊重されねばならないとする思想である。「人権」という観念もここに由来する。しかし、この「人間的」(human)という審級は、どこにその根拠をもつのだろうか。

「人間的」という言葉を措くことで、人間は、何を伝えようとしてきたのか。そして、3.11以前と以後とで、「人間的」という概念に、意味の異同が生じてはいないか。「人間的」という言葉を批判的に検討することで、3.11以後の新しい「人間」像に迫る。

故郷を甘美に思う者はまだくちばしの黄色い未熟者である。

あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかかなりの力をたくわえた者である。

だが、全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である。

(聖ヴィクトルのフーゴー)